

## 2. 里山を生産林に

里山は、かつては集落と一体化したいわば生活環境の一部でありましたが、時代とともに置き去りにされてきています。一部では、その再生に取り組む活動もありますが、広く展開される状況にはありません。この里山は実は、単なる林産物を得るということだけではなく、審美的な価値を見出すランドスケープ、洪水調整、地表並びに地下水など多様な公的な価値を有しています。そう考えると、本来は里山というのは、農家の個人的な対象よりも、より社会的公的な利益を考えて利用・管理することが重要なものです。そのためには、一方的な収奪の対象ではなく、公的な環境財として保全すべきものです。現状は多くの里山が放棄された状況にあり、少子高齢化や社会の構造が変化したこともあって、目先の見えるところでは不要のものになっているのかもしれませんが。基本的には、里山問題は森林環境全体に関連していますので、その重要な役割について里山を地産地消のシンボルに使うなどの広い視野で見直す必要があります。

とはいっても、昔の姿に戻すというのは現実的でなく、少なくとも里山を見られる環境にする、身近な存在にする、森林都市または森林との共存実感できるものにする必要があります。したがって、里山の新たな価値向上への構想、そのためのプロセスを確実にすることが、自然災害対策とも絡めて課題解決の一つであると考えています。その一つは、里山を生産林へ転用するということです。里山は多くのところが道路等の地の利に優れていますので、管理・伐採する上でも奥山や急傾斜地とは異なって効率的であると思われる。もちろん、生産のほかにさまざまな機能が維持されるように、単一林ではなく混交するなどの工夫はあると思います。そして、最も期待するのは、森林への関心ということで、地域がかかわることで関心が高まりますし、日常生活の中で森林教育の基本が醸成されるような気がします。自然災害への備えや前兆に敏感になるということは、継続して関心を持ち続けることから里山を再活用する、自分たちの環境財として維持継続するということが、極めて大切なことだと思います。自然災害は、森林の環境と密接していて、山林国でありながら、その知識は極めて希薄であるような気がします。わが国の地形や地質と地理的環境、とくに気象の変化によりさまざまな災害が発生し被害も想定を超えるものが発現します。そして、森林環境が健全で、都市環境とも共存できるということは少なくとも被害を最小にするためには不可欠ですし、それには地域ごとのリスクを共有しながら、生活環境を守り、改善、修正することをしておく必要があります。そのためにも、新たな構想での自然環境を持続可能に活用する知恵が、いまこそ必要になると思います。里山との近い関係を取り戻したい。